第Ⅳ章　遺　　跡

1　遺跡の概観

A　山田寺の地形造成

山田寺は竜門山地の西北縁辺部に位置する（Fig.16）。東方の丘陵は小さな谷と尾根が連続しており、その末端の起伏のある自然地形を、山田寺の造営にあたってほぼ平坦に造成している。後述する発掘成果から、その地形造成等はおおむね以下のような過程が推定できる。

山田寺造営以前の古墳時代には、谷が徐々に埋まっていた。７世紀前半には、蘇我倉山田石川麻呂かその一族の邸宅が営まれたようだが、大規模な整地や切土が行われた様子はない。その後、大規模な整地が行われる。この整地は、ほぼ山田寺全域に及び、７世紀中頃の山田寺造営の初期造成と推定できる。さらに７世紀後半には、塔や講堂等の造営のための再造成が行われている。以下では、山田寺造営以前と山田寺建設に伴う地形造成の状況をみてみよう。

山田寺以前（Fig.17）　現況の地形（Fig.16）だと、山田寺南門SB001の東方に尾根が迫っている。この尾根を「尾根A」、その南の谷を「谷A」、山田池のある北の谷を「谷B」、谷Bの北の尾根を「尾根B」と呼ぶことにする。

谷Aの延長と見られる谷筋には西南にのびる７世紀前半の水路SD619があり、これは先行する古墳時代の流路SD593を踏襲しながら整備したものと考えられる。谷Bは谷Aに比べてやや幅が広い。この谷は北と南に分かれ、南の谷が古墳時代の谷SD568・569になる。さらに尾根Bは、現況では

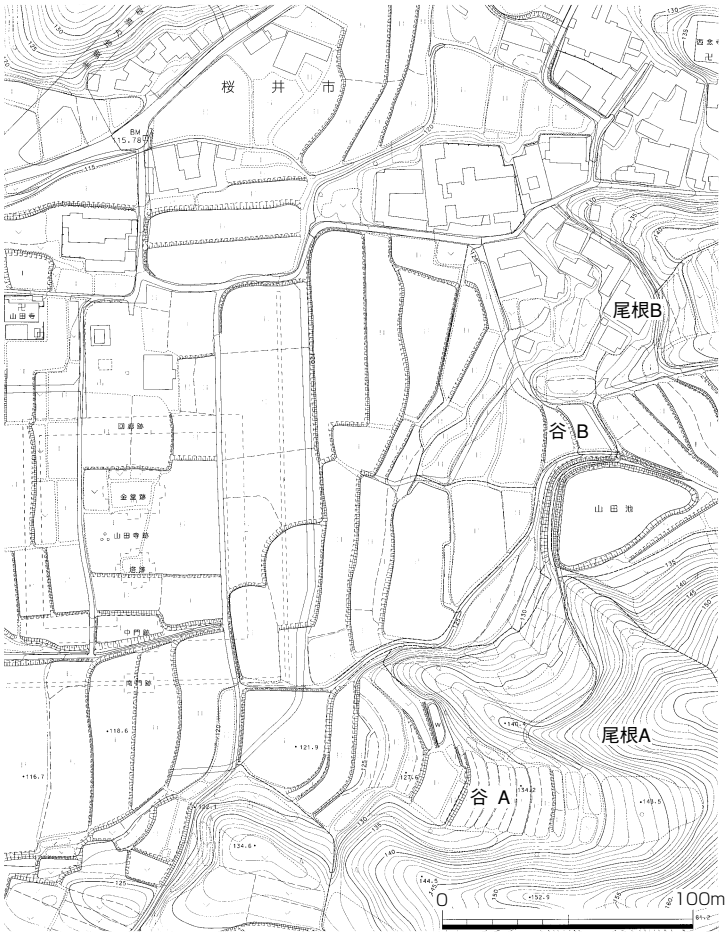


Fig.16　山田寺周辺の地形　1：3000

先端部が切られているが、本来は北西と南西に伸びる形状を示している。

７世紀前半には、古墳時代の谷はかなり埋まり、山田寺南門SB001から塔SB005付近までと、塔から西55mあたりまでの範囲は、ゆるやかな西下りの、おおむね平坦な面をなす。この平坦面の南端には、SD607・619を側溝とする山田道SF608に沿って塀SA620があることから、北方は蘇我倉山田石川麻呂かその一族の邸宅であった可能性が高い（第Ⅳ章２Ｋ参照）。

石川麻呂の邸宅か

山田寺建設に伴う造成（Fig.18）　山田寺の創建時には、東の丘陵を削平し、西の谷を厚いところで２m以上整地している。整地土は大きくは上・中層と下層に区分できる（付図２参照）。

下層整地は、古墳時代の谷の堆積土および７世紀前半の堆積土上にあり、金堂SB010付近から西にゆるやかに下り、西面大垣SA680付近から西に急角度に落ち込む（西辺で厚さ１m以上）。

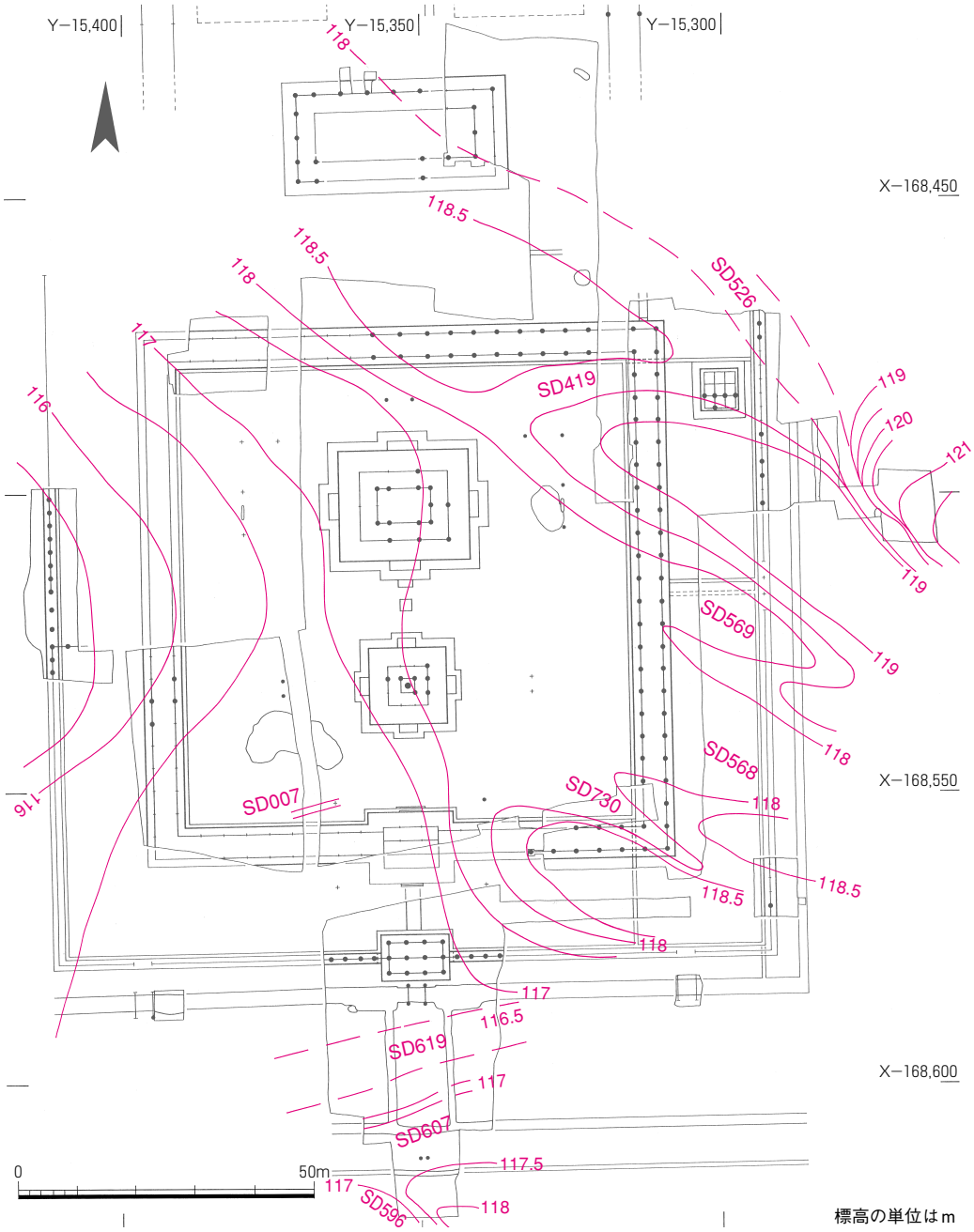


Fig.17　７世紀前半の地形復元　1:1200

山田寺造営時には、西に比較的深い谷が残り、これを厚い整地で埋め立てたと推測できる。第Ⅳ章２Ｄで触れるように、金堂基壇の掘込み地業の時には、西辺は下層整地のままで、西にかなりの傾斜をもっていた。金堂の完成、そして中門SB001や回廊の建設をへて、寺域の地均し（上・中層整地）も一応終了するが、金堂から南は中門にむけてゆるやかに下っていたことは確かであり、やがて塔SB005の建設によって再整地され、南への傾斜はほとんどなくなる。

遺存状況の良好な回廊北東隅は基壇面が標高約119.0mと最も高い。第Ⅳ章２Ｃ・Ｊで述べるように、東面回廊は南へ、北面回廊は西へゆるやかに下るが、基壇端は標高118.5mの等高線に沿う。南面回廊や中門も大差ないと考えられるが、西面回廊や西面大垣は他より低く復元されることから、寺域の整地や伽藍自体が全体に西下りであったことは否めない。　西下り整地

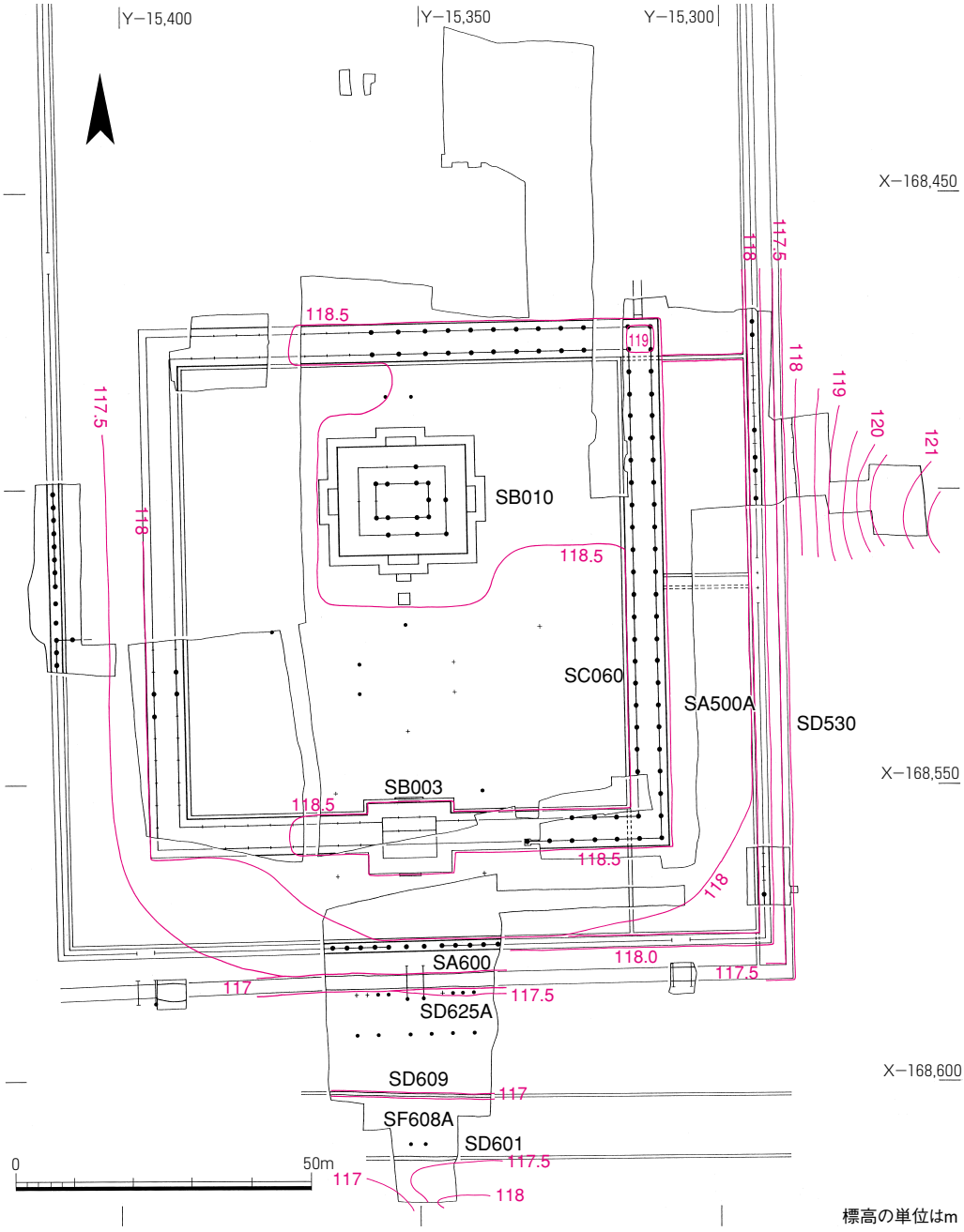


Fig.18　山田寺創建期（７世紀中頃）の地形復元　1:1200

B　土層と遺構

山田寺の造営に伴う大規模な整地については前節Ａで述べた。ここでは各堂塔の創建以後の整地や堆積土と遺構および遺構同士の先後関係について主に述べる。便宜的に、塔SB005と金堂SB010及び北面回廊SC080周辺（第１～３次調査）、東面回廊SC060と南面回廊SC050及び東面大垣SA500周辺（第４～６・８・９次調査）、南門SB001と南面大垣SA600周辺（第７次調査）に区分して記述する。

中門SB003と西面回廊SC070周辺（第１次調査区南辺と西半部）、西面大垣SA680周辺（第８次調査西区）、講堂SB100（第３次調査区北半部）周辺は、創建時の整地土がかなり削平され、主要遺構の重複もないことから、ここでは触れない。

ｉ　塔・金堂・北面回廊付近の状況（Tab.６）

土層　塔SB005や金堂SB010は薄い表土に覆われていた。これを取ると、基壇土になったが、後世にかなり破壊されていた。ともに裾は水田の耕作が及び、床土下は灰褐色土、暗褐色土（焼土層）が堆積し、犬走りの敷石面に至った。

塔や金堂の犬走り外側の基本的層序は、耕土と床土、灰褐色土、灰褐色粗砂や灰褐色粘質土等の互層（以下では、粘土・砂互層堆積B）、多量の瓦と焼土を含む暗褐色土（焼土層）、暗青灰色粘土や灰褐色粗砂などの互層（以下では、粘土・砂互層堆積A）、バラス敷、瓦敷、整地土の順である。

中世の堆積　粘土・砂互層堆積Bは、第１・２次調査区東端の東面回廊近くでは厚さが20～30㎝だが、金堂の東では東面階段から東９ｍほどの30区付近で、塔にむけては回廊から７ｍほどの27区付近で薄くなって終わる。東からの流入土である。年代は、後述する東面回廊の調査で中世と判明。

焼土層　多量の瓦や焼土を含む暗褐色土（焼土層）は、塔・金堂周辺では40～60㎝と厚いが、塔や金堂の東では30区付近で薄くなって終わる。塔の南では南階段から２～３ｍのMQ区付近、西では調査区西端の42区付近まであるが、これより外は後世の削平を受けている。金堂の北では北階段の北４～５ｍのLQ区付近までであり、西は調査区西端まで残る。塔や金堂の焼亡を物語る。金堂の南面犬走りは、火を受けて赤変しており、犬走りの少なくとも一部は焼亡直前まで、土に覆われず露出していたことが知れる。焼亡年代は、後述するSD208～211の年代から、12世紀中～後半頃と推定。文治３年（1187）の興福寺僧兵乱入によって焼亡した可能性がある。

粘土・砂互層堆積Aは、第１・２次調査区東端の東面回廊近くでは20～50㎝と厚いが、塔の東では東面階段犬走り近くの34区付近、金堂の東では29区付近で薄くなって終わる。東からの流入土である。下のバラス敷の年代から、10世紀以後になる。第４～６次調査等の結果、東面回廊を倒壊させた土砂崩れに伴う流入土であり、年代は11世紀前半になる可能性が高い。

バラス敷と瓦敷　バラス敷は、塔の西や南の中門付近がかなり削平されたのを除くと、回廊内のほぼ全面に残っていた。厚さは10～20㎝であり、土や瓦を混えた部分があった。年代は出土土器から10世紀になる。

瓦敷は、回廊内のほぼ全面に認められたが、疎らなところもあった。塔の西や南の中門近く

は削平されたようである。また、金堂周辺では上下２層があった。下層の瓦敷は、後述する飛鳥Ⅳの土器を出土した土坑SK405を覆い、天武朝以後となる。また、下層の瓦敷には、後述するように一枚づくりの平瓦、山田寺式（重弧文）軒平瓦F型式Ⅰ種などを用いたところがあり、奈良時代中頃～後半になる可能性がある。

なお、SK405と瓦敷との間には10～15㎝の整地土があった。また、塔の北面階段下で検出したSX181～183は、後述するように塔の基壇の掘込み地業より古く、７世紀中頃の幢幡施設と推測するが、この上にも厚さ20～30㎝の整地土があった。部分的な検出に止まるが、塔の造営や金堂修理に伴い周辺を整地した状況が知れる。

北面回廊SC080の中央付近（第２次調査区）は、かなり削平され、回廊内のバラス敷や瓦敷も残っていなかった。東端部付近（第３次調査区）は残りがよく、回廊内には瓦敷、バラス敷があり、粘土・砂互層堆積ＡとＢも薄いながら認められた。基壇直上には薄い淡灰褐色砂質土、この上には瓦が堆積した茶褐色粘質土があった。茶褐色粘質土は粘土・砂互層堆積Ｂより古く、東面回廊倒壊に伴う可能性を示すが、部材がなく、わずかながらも12～13世紀の土器を含み問題が残る。茶褐色粘質土及び北面回廊の南雨落溝SD081の最上層には焼土があるが、焼亡したといえる程の量ではない。倒壊した部材をかたづけ、その一部を燃やしたのであろうか。北面回廊以北では、灰褐色土、灰褐色砂質土、11世紀後半の遺物を含む灰褐色粘質土、地山の順であり、創建時の整地土はなかった。

遺構との関係　塔SB005は、基壇築成にあたって一回り大きな掘込み地業をしている。この地業は、後で詳述するように、金堂の最終整地を切っており、金堂→塔の順となる。周辺から出土した瓦からみると塔の完成は天武朝である（第Ⅴ章３参照）。　金堂→塔

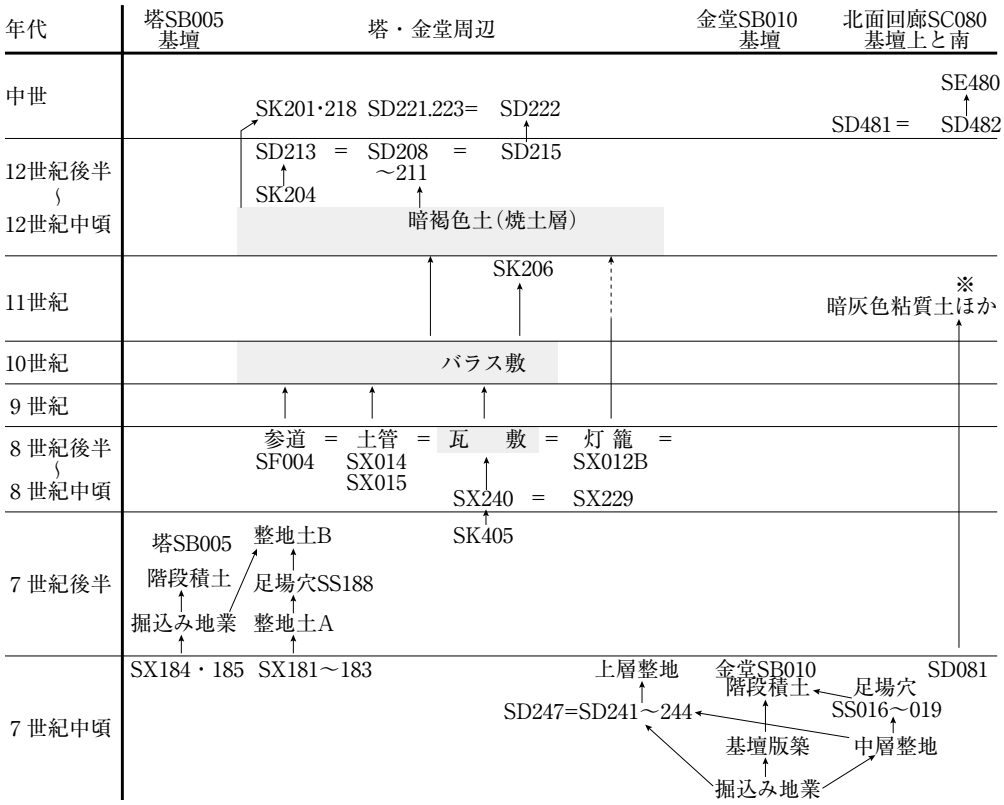
塔の地業より古い穴がいくつかある。塔西面階段の南と北のSX184･185、塔北面階段下のSX181～183である。これらは山田寺創建時の厚い整地土より新しく、塔創建以前、金堂創建時の遺構と判断できる。塔東階段北で検出したSS188は、塔の掘込み地業より新しく、塔の犬走りに伴う整地より古いことから、足場穴と理解した。塔基壇築成中あるいは築成後の整地については後に改めて触れる。　塔造営以前の遺構

大土坑SK006は、山田寺創建時の整地土より新しく、一部ではバラス敷が覆う。出土遺物から塔創建に関わる７世紀後半（670～690年頃）の廃棄物土坑と判断。参道SF004、土管を立てたSX014は瓦敷と一連になっており、瓦敷と共存する。　塔の年代

塔基壇の西と北を巡る溝SD196・197は、塔階段の犬走りを破壊し、焼土層を切っている。後述する金堂を巡る溝SD208～211と似た遺構であり、塔焼亡直後の跡かたづけに伴う排水溝である可能性が高い。塔北西の土坑SK201・203は、暗褐色土（焼土層）より新しく、出土遺物から、前者は中世、後者は12世紀中頃～後半。塔東南の井戸SE233・234は、バラス敷より新しく、出土遺物から中世。蛇行溝SD236は、14世紀頃の井戸SE231より古く、溝内から回廊の地覆石が出土していることから、11世紀前半以降となる。SD236は、後で触れるように、中門や南門を避けるように蛇行しており、山田寺廃絶の12世紀後半（末頃）以前である可能性が強い。なお、金堂周辺の焼土層から11世紀中頃～後半の均整唐草文軒平瓦Ⅲが出土。

金堂SB010の創建は７世紀中頃（第Ⅳ章２Ｄ参照）。基壇築成にあたっては一回り大きな掘込み地業をしている。基壇外装等に伴う整地については改めて詳述するが、階段部分での断割り

Tab.6　土層と遺構の先後・共存関係一覧１（金堂・塔・北面回廊）



↑先後関係　＝共存関係　※粘土・砂互層堆積Ａ　※※粘土・砂互層堆積Ｂ

金堂造営の工　程

調査によって、掘込み地業→整地→階段部版築→犬走りに伴う整地の順が追える。各階段の版築下で検出した穴SS016〜019は、掘込み地業とその上の整地よりも新しい。金堂基壇築成中の水替え用の穴とする見方もあったが、いずれも階段のほぼ中央にあることから、金堂建設に伴う足場穴である可能性が強い。各階段の犬走りのすぐ外では、溝状の落込みSD241〜244を検出。掘込み地業とこの上の整地土より新しく、犬走りや南の礼拝石SX011より古いことから、金堂基壇築成時の排水施設と考える。これらは金堂の周囲をめぐり、南西端で検出した土坑SK204や暗渠SX212下の落込みSD247を通って西か南西に排水したと推測できる。

礼拝石SX011は南階段の犬走りに密接しており、金堂創建時。灯籠SX012と土管を立てたSX015は瓦敷と一体であり、これと共存する。ただし、灯籠の基壇側石は改作（SX012B）されており、金堂創建時に存在した可能性（SX012A）がある。新しい時期の灯籠（SX012B）は、周辺で多量に出土した灯明皿の年代から、８世紀後半から10世紀後半頃まで役目を果たしていたと推測できる。

土坑SK405は瓦敷下で検出し、出土遺物から、７世紀後半（670〜690年頃）の金堂修理に伴う廃棄物土坑と判断した。SK405より新しい２個の柱穴SX229は、瓦敷との先後関係が明らかでないが、SX229の中間にある長い土坑状のSX240は、瓦敷より古い。SX229とSX240は一体の施設で、瓦敷より古くなる可能性は十分ある。SX229の北で東西に並ぶ柱穴SX235はバラス敷より古い。東の柱穴はSX229と筋がほぼ揃いこれと同時期になるかもしれない。

金堂基壇の周囲を巡る溝SD209〜211は、北西ではSD215に、南西では暗渠SX212を通して

SD213につながる。いずれも暗褐色土（焼土層）より新しい。出土土器は12世紀中頃～後半であり、土器の編年からすると12世紀末頃にもなりうる。金堂の焼亡もこれに近い時期と推測。SD211からは鎌倉時代初期頃の巴文軒丸瓦（右巴文A種）が出土しており、この時期まで溝の一部はまだ埋まっていなかったことになる。土坑SK203・204・207も暗褐色土（焼土層）より新しい。金堂焼亡後の跡かたづけとみる。土坑SK206は、バラス敷より新しく、出土土器から11世紀中頃に比定。土坑SK228も暗褐色土（焼土層）より新しいが、出土土器から13世紀中頃～後半。

金堂焼亡の年代

北面回廊SC080を横切る溝SD221とこれと一連のSD222・223は、13～15世紀の土器を出土。いずれの溝からも鎌倉時代前期の巴文軒丸瓦（左・右巴文A種）などが比較的多く出土しており、開削時期は13世紀になる可能性がある。斜行溝SD481は13世紀頃。14世紀後半の井戸SE480よりより古いSD482は、SD481とつながる可能性がある。

北面回廊以北では、11世紀後半の土器を含む灰褐色粘質土下で、土坑SK430を検出。出土遺物から７世紀後半。土坑SK434と井戸SE432・433は、11世紀前半の灰褐色粘質土より新しく、出土土器から、前一者は11世紀後半、後二者は中世になる。なお、北面回廊の南雨落溝SD081は、既述した粘土・砂互層堆積Aが覆い、11世紀前半に完全に埋まるが、溝内の出土土器から、10世紀代には機能していたことが知れる。

ii　東面・南面回廊と東面大垣付近の状況（Tab.７）

土層　東面回廊SC060は、第４～６・８次調査でほぼ全面を発掘した。宝蔵SB660も全容が明らかとなった。また、南面回廊ＳＣ050も東端部の遺構（第10次調査）、東面大垣ＳＡ500や東面築地ＳＡ535も部分的にではあるが遺構の様子が明らかとなった（第４・６・９次調査）。これらの遺構は、東面大垣の北端部（第６次調査北区）を除くと、幾度か東から土砂の流入を受けたことが明らかである。以下では、第４次調査（東面回廊第16～18間以東の調査）の成果を基本として、土層について述べる。

東面回廊SC060付近は、東に段々と高い水田である。耕土と床土、灰褐色あるいは青灰色砂質土の順で、この下はいずれの調査区でも中世の遺物を含む淡褐色あるいは茶褐（青灰）色砂土が認められた（粘土・砂互層堆積B）。この層は第４次調査区の場合、東面築地SA535の東では厚さが20～30㎝だが、SA535の西では20～50㎝と厚く、東面回廊上では20～30㎝と薄くなる。北の第８次調査区の北辺では、厚さが20～50㎝あり、回廊基壇上でも厚さが20～30㎝ある。南の第５・６次調査区の場合、東面回廊のすぐ東では60～70㎝だが、東面回廊の西では20～30㎝と薄くなり、第１・２次調査区に及ぶ。回廊東南隅付近では厚さが１ｍ近くある。

中世の堆積

粘土・砂互層堆積B下の土層は、東面回廊上では暗灰色ないし暗青灰色砂土（粘土・砂互層堆積A）、暗茶褐色粘質土、瓦堆積、部材を含む茶褐色有機土、砂混り暗青灰色粘質土、基壇土の順である。

粘土・砂互層堆積Aは、第４・８次調査区では厚さが20～40㎝、第５・６次調査区では厚さが20～50㎝。暗褐色粘質土から基壇直上の砂混り暗青灰色粘質土までは厚さが20～40㎝で、これらの間からは東面回廊の部材や瓦が西に倒壊した状態で検出された。出土した土器はいずれも11世紀前半までである。なお、基壇直上では、延喜通宝（初鋳907年）が出土した。

Tab.7　土層と遺構の先後・共存関係一覧２（東面回廊・南面回廊・東面大垣）

年代	南面回廊SC050 基壇上	基壇南	基壇西	東面回廊SC060 基壇上
中世				淡褐色砂土※※
12世紀前半 〜 11世紀後半				
11世紀前半	茶褐色砂※ 瓦堆積・部材 暗青灰色粗砂 暗青灰色粘質土			暗灰・暗青灰色砂土※ 暗茶褐色粘質土 瓦堆積 部材・茶褐色有機土 砂混り暗青灰色粘質土
11世紀初 〜 10世紀末	↑	灰黒色砂土 暗灰色砂質土	SD732 SD731 暗灰褐色粘質土	↑
10世紀	地覆石抜取り SX710	暗緑灰色砂質土	バラス敷	地覆石抜取り SX560
9世紀				↑
8世紀後半 〜 8世紀中頃			瓦　敷	↑
7世紀後半				↑
7世紀中頃	南面回廊 SC050　＝　南扉口 SX735	暗渠 SX700＝SD061	暗　渠 SX670　＝	東面回廊 SC060 ↑ SK550

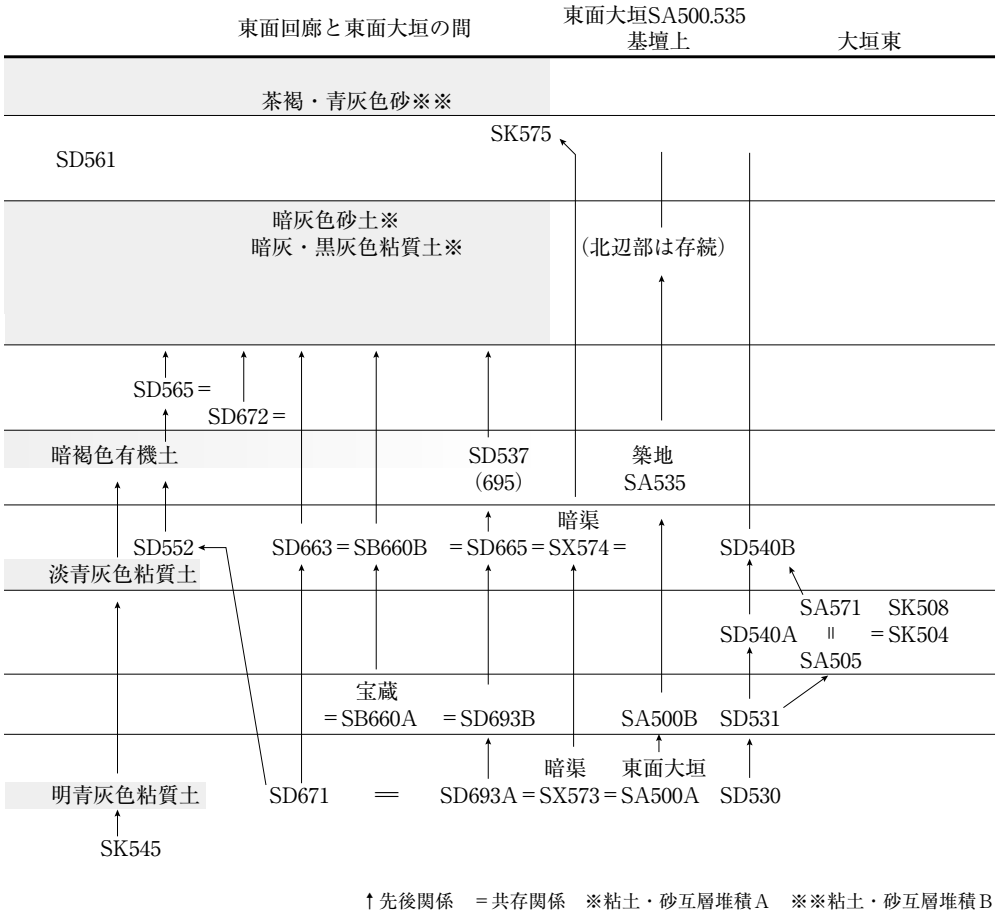
粘土・砂互層堆積Aや倒壊部材・瓦は、東面回廊の西にも薄くなりながらも拡がり、第１〜３次調査区にも及ぶ。前項で触れたように、粘土・砂互層堆積Aは、塔・金堂焼亡（12世紀中頃〜後半頃）を示す暗褐色土（焼土層）下にある。しかも、倒壊部材直上にあることから、東面回廊の倒壊に密接に関わる流入土である可能性は高いといえる。第８次調査区では、粘土・砂互層堆積は薄く、倒壊部材もきわめて少ないことから、部材をかたづけ得る程に土砂の流入も少なかったと理解する。

塔・金堂焼亡
↓
回廊倒壊

東面回廊西では、倒壊部材を含む茶褐色有機土の下に薄い暗灰褐色粘質土を挟んで、バラス敷、瓦敷、整地土となる。暗灰褐色粘質土では、10世紀末〜11世紀初頭頃の土器が出土し、東面回廊倒壊の年代がより明確になった。バラス敷直上では、富寿神宝（初鋳818年）と延喜通宝が出土した。

東面回廊の倒壊年代

東面回廊東では、粘土・砂互層堆積B以下が、暗灰色砂土、暗灰色粘質土（第８次調査区は黒灰色粘質土）、暗褐色有機土、淡青灰（暗青灰）色粘質土、整地土である明青灰（青灰）色粘質土の順。暗灰色砂土や暗灰色粘質土は、第４次調査区の東面築地SA535上では厚さ20㎝程だが、この東では40〜80㎝、西では30〜40㎝と厚い。第５・６次調査区や第８次調査区では厚さが20〜30㎝。いずれの調査区でも東面回廊の基壇東側石上に及ぶ。両層とも11世紀前半の土器を含み、粘土・砂互層堆積Aに対応する。第８次調査区の宝蔵は、主に屋根部材が南西に倒壊した状態



で検出されたが、建物の軸部はなく、後にかたづけられたと考えられることから、土砂の流入は比較的少なかったと推測される。

暗褐色有機土は、東面回廊の基壇側石の上端近くまで堆積する。第５・６次調査区では厚さ20～40㎝、第４次調査区では10～30㎝であり、東面築地SA535の西裾で一端終わるが、SA535の東にもある。10世紀後半の土器が主だが、一部では10世紀末から11世紀初頭頃の土器を含む。第４次調査区では暗褐色有機土面、第４・８次調査区では土塁状になったSA535上でもそれぞれ立木が根をはった状態で残っていた。東面回廊が倒壊する直前には、東面回廊は基壇上端近くまで徐々に埋まり、東面築地も崩れ、所々に木が繁る状況になっていたと推測できる。

回廊東は徐々に埋没

淡青灰色粘質土は、10㎝前後と薄く、奈良時代後半の軒丸瓦（6143A）や９世紀頃の土器を含む。第４次調査区では、東面回廊から東面築地の裾近くまであった。

南面回廊SC050上の土層は、東面回廊上とほぼ一致し、茶褐色ないし赤茶褐色砂（粘土・砂互層堆積A）、瓦堆積、多量の倒壊部材を含む暗青灰色粗砂、暗青灰色粘質土、基壇土の順。粘土・砂互層堆積Bは、後世の削平のため残らず、粘土・砂互層堆積Aも部分的に厚さ10～30㎝残るにすぎないが、建物部材は調査区のほぼ全域で北ないし北西に倒壊しており、土砂の流入は激しかったと推測する。

南面回廊の基壇南では、暗青灰色粗砂下に10世紀中頃～11世紀初頭頃の土器を含む灰黒色粘

回廊南も徐々に埋没

砂土や暗灰色砂質土があり、この下は暗褐色有機土に対応する暗緑灰色砂質土、地山となる。暗緑灰色砂質土は基壇南側石の半ばに達し、南面回廊の少なくとも東寄りは東面回廊と同様に倒壊前には外側がかなり埋まっていたと知れる。

東面築地SA535の南端付近（第９次調査区）では、粘土・砂互層堆積Bを含む層が厚さ1.2～1.5m、粘土・砂互層堆積A相当の黒灰色粘質土が70～80cmある。東面築地の東と西では、暗褐色有機土相当と思われる10世紀頃の土器を含む暗灰色砂土第１層と青灰色粗砂、９世紀初頭頃の土器を含む暗灰色砂土第３層、整地土、地山の順である。他に、東面築地の東では、東面大垣SA500Bの倒壊を示す建物部材や落下瓦の堆積（暗灰色砂土第２層）がある。この層からは、延喜通宝（初鋳907年）や平安時代の瓦が出土し、SA500BからSA535への建替えが10世紀前半と判明した。

遺構との関係　回廊は、後で詳述するように所用瓦や造営計画からみて、金堂とほぼ同じ時期７世紀中頃の築造である。東面回廊SC060の基壇上では、足場穴SS062→地覆石→地覆石抜取り痕跡SX560の順に新しくなる。地覆石は東面回廊創建時であり、これより古い柱穴列であるSS062は創建時の足場穴となる。足場穴は西側柱筋（SS064）と棟通り（SS066）にもある。これらの多くはSS062と柱筋が揃い創建時と推測できるが、SS064の一部（第６次調査区）では掘形から縄叩きの平瓦が出土し、回廊の修理に伴うものもあったと考えられる。

回廊の改修とその年代

SX560は、地覆石を抜き取った跡に瓦や土を詰め、その後地覆材を据え直したと考えられるものである。10世紀（第５次調査区）、もしくは10世紀末～11世紀初頭頃（第８次調査区）の土器が出土している。後述する南面回廊でも同様だが、出土土器は10世紀中頃～後半。場所によって多少の時期差はあるにしても、地覆石の抜取り改修は10世紀後半頃を中心とした時期と推測する。

なお、第４次調査区では、９世紀頃に、部分的にではあるが基壇上に土を入れ、基壇面を整えている。基壇東側石の裏込め上半部には、瓦が混ることを処々で確認。この土からは、、第４・８次調査区では一枚づくりの平瓦が出土し、しかも第５・６次調査では上述のSX560の一部を覆うことから、地覆石抜取り改修時に基壇東縁を積み直したと推測できる。また、側石の一部には薄いものもあり、倒壊前に積み直された可能性もある。白土採掘坑とみたSK550は、西端は東面回廊の基壇側石下になり、創建時となる。近接するSK545も同様の遺構で、創建時の整地土（明青灰色粘質土）下で検出。

東面回廊のすぐ東には、ほぼ同じ位置で重複する３条の南北溝SD522・565・561がある。堆積土との関係では、９世紀頃の淡青灰色粘質土→SD522→10世紀後半を主とし10世紀末頃～11世紀初頭頃の土器を含む暗褐色有機土→SD565→11世紀前半の粘土・砂互層堆積A→SD561の順に新しくなる。

SD522は寛平大宝（初鋳890年）や10世紀後半の土器を含み、廃絶の時期が知れる。SD565は11世紀前半の土器を含み、東面回廊倒壊時に埋没。位置は基壇側石により近くなる。SD561は、一部が東面回廊基壇側石上を通る溝（第５次調査区）で、護岸に部材・瓦を用いている（第５・８時調査区）。これらの部材は倒壊した東面回廊のものと判断できる。南は、回廊東南端をまわって、後述する南門SB001東脇のSD629に注ぐと推測する。他に、東面回廊北端では基壇上を溝SD667が北流する。出土土器からは12～13世紀になる。

上述したSD552より古い溝が２条ある。１条は東面回廊の東扉口SX065の東にある東西溝SD069。東扉口に関わる溝で創建時期になる可能性がある。他の１条は、東面回廊東北隅の暗渠SX670から東に出る東西溝SD671であり、SD552より古い。この溝は宝蔵SB660の北雨落溝SD663の下にあり、レベルからみて、後述する東面大垣SA500の西雨落溝SD693につながると考えうる。SD552開削後は、暗渠SX670からの水はSD552に排水されることになる。ただし、SX670の出口にあたるSD552西岸は部材で護岸しており、ほどなくSX670は詰って機能しなくなったと推測される。

南面回廊SC050の基壇上では、地覆石は残らず、地覆石抜取り痕跡SX710下で足場穴SS713を検出した。SX710は既述したように10世紀後半中頃～後半の土器が出土。地覆石抜取り改修時には、基壇南縁にも土を入れ、基壇面を整えている。回廊東南隅では、棟通りや入隅の礎石に小礎石SX708・715・717があり、床張りの可能性を示す。SX717は地覆座を造り出した面を下にする。同様のものは扉口SX065・066にあり、東面回廊南端にも扉口SX735があった可能性が大きい。とすると、SX708・715・717は南面回廊の地覆石抜取り痕跡SX710と同時期となりうる。回廊東北隅の小礎石SX673・674も同様と推測する。通るのに障害となる棟通りに小礎石があり、しかも倒壊部材が覆うことから、11世紀前半の回廊倒壊直前頃まで存在したことは確かであろう。床張りとすると、この時点では、内開きの扉口SX666は少なくとも開閉できなくなっていたことになる。

南面回廊東端部の南北暗渠SX700は、時期は不明だが、南・北端の蓋石や側石を取り除き、流れをよくしている。SX700が詰まったのちは、蓋石上に素掘りの南北溝SD731が設けられる。南面回廊基壇の南では、２条の東西溝SD705・732がある。位置は後者が側石に近い。堆積土との関係から、SD705→暗緑灰色砂質土（東面回廊東の暗褐色有機土対応）→SD732→10世紀中頃～11世紀初頭頃の土器を含む灰黒色粘砂土・暗灰色砂質土の順に新しくなる。

SD705とSD732の位置や年代観は、東面回廊のSD522とSD565とほぼ一致し、それぞれが回廊東南出隅で連結していたと推測できる。SD705・732と、暗渠SX700と南北溝SD731との関係は、調査上の制約から明確でないが、SD705埋没後、この上をSD731が通っていたことは確かであり、回廊倒壊直前頃まで南への排水は続いていた可能性が高い。一方、SD705は、SD552と連結し、上限が９世紀頃。暗渠SX700は、SD705と連結されたであろうが、SD705開削以前は、南に直に排水されたと推測できる。なお、SX700に注ぐ東面回廊西雨落溝SD061は、出土土器から、少なくとも10世紀後半までは機能していたことが知れる。

東面大垣改修の年代

東面大垣SA500は建替えがあり（SA500A・B）、第４次調査では、後述するように東面大垣の東に７世紀中頃に掘られたと推測される基幹排水路の南北大溝SD530があり、これに沿う東面大垣（SA500A）も、この時期に存在したと考えうる。東面回廊から東面大垣までの間は、地形に逆らってわざわざ東に傾斜するように地山を成形し、東面大垣の西雨落溝SD693で排水処理していることからも、SA500は回廊とともに創建時（７世紀中頃）に計画、施工されたと考えうる。南端近くの第９次調査では、新しいSA500Bが倒壊し、その部材を埋めて整地した土に、東面築地SA535をつくったことが判明。SA500BからSA535への建替え時期は、倒壊した瓦に平安時代のものがあり、延喜通宝（初鋳907年）も出土したことから、10世紀前半と判断。SA500Aの西雨落溝SD693は埋め、やや西にSA535の西雨落溝SD695をつくる。同じ状況は北の第４次調

査区でも認められる（SD695はとぎれ、北はSD537とした）。このすぐ北の第８次調査区では、宝蔵の雨落溝があり、様相がやや複雑になる。

宝蔵の改修とその年代

宝蔵SB660は、天武朝創建（SB660A）、その後９世紀中頃に改作される（SB660B）。SB660Aの時期には、既述したように基壇のすぐ北を、回廊の暗渠SX670からつづく東西溝SD671が通り、SA500Aの西雨落溝SD693Aにつながる。他の３辺には雨落溝SD661A・662A・664Aを設ける。SB660Bの時期には、雨落溝をSD661B・662B・664Bに改作する。これらの水は、最終的には北西のSD672に注ぐが、９世紀中頃には東の雨落溝SD662と一連である南北溝SD665（SA500Bと共存）を通って北に排水した可能性が高い。東面築地SA535に伴う西の南北溝SD537はSD665の上になると推測する。

東面大垣の北端（第６次調査区北区）は削平され、東面築地は残っていない。ただし、すぐ西に２条の暗渠SX573・574がある。東のSX573が古く、出土瓦から、少なくとも奈良時代末まで機能していたこと、西のSX574は12世紀前半の土坑SK575によって破壊されたことが知れる。位置関係や年代観から、SX573は東面大垣SA500Aに伴うSD693、SX574は東面築地SA535に伴うSD537につながると考えうる。SD537の下になるSD665はSX574に注いだ可能性が高い。

基幹排水路の改修年代

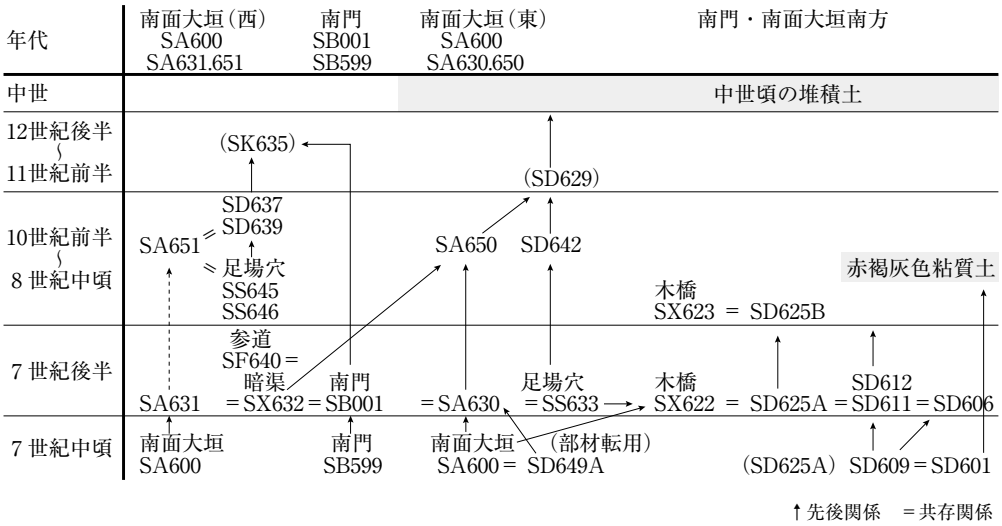
東面大垣SA500のすぐ東には、基幹排水路である２条の南北溝SD530・531がある。前者は素掘り、後者はSD530の東肩を壊してつくった石積み溝。第４次調査では、出土遺物から、SD530を７世紀中頃～後半、SD531を７世紀後半～８世紀前半とした。SD531埋没後も、この上には南北溝（SD540）があり、出土遺物から少なくとも９世紀前半まで機能していたことが知れるが、堆積土の状況から東面築地SA535の時期にも存続した可能性が高い。南の第９次調査区では、部分的な発掘のため、年代の決め手は得られなかったが、３時期の溝の重複（SD530・531・540）があった。北の第６次調査区北区では、SD530は平安時代に入り、これを改めた石積み溝は時期的にSD540に対応すると考えられる。

東面大垣東方の変遷

東面大垣SA500の東方は、西寄りを雛壇状（SX510・525・542など）にし、SX510より東は比較的平坦な面を造成していた。第４次調査区では、この雛壇状の造成面で東西塀SA505の柱穴を検出。SA505は、西端の柱穴が東面築地SA535の基壇部下、西から３本目の柱穴が南北溝SD531の石積みを破壊していることから、奈良時代中頃に比定。西端の柱穴は東面大垣SA500の基壇と重複することから、これを掘り込むようにして柱を立て、SA500Bに連結していたとみられる。雛壇状造成は創建時とみてきたが、少なくともSX525以東はSA505と密接な関係をもち、奈良時代中頃の仕事である可能性が高い。一方、第６次調査区では、SD540の石積み下で柱穴SA571を検出。年代の決め手に欠けるが、SA571は北面大垣の東延長線上、SA505は金堂心の東延長線上で、東面回廊の北から１／３の位置にあり、両者は一体のものとして計画施工され、大垣の東北部の区画（東北院と仮称）の北・南限塀であった可能性は十分ある。

この区画の存続時期については、手掛かりが少ないが、SA505の南と北にある東西方向に長い溝状の土坑SK504・508がSA505の雨落溝である可能性があることからすると、出土遺物から９世紀前半までは機能していたことが窺われる。また、SK504の南にある掘立柱建物SB501の掘形に平安時代前半の土器を含むことからすると、付近は10世紀に入る頃まで生活の場として使われたことになる。

Tab.8　土層と遺構の先後・共存関係一覧３（南門・南面大垣）



iii　南門・南面大垣付近の状況（Tab.8）

土層　調査地は西に低い水田である。基本的層序は、耕土と床土、暗灰色砂質土、青灰色粘質土や青灰色微砂等の中世頃の堆積層、創建時の整地土の順である。

黄灰褐色土は、調査区のほぼ全面に薄くある（厚さ約10㎝）。暗灰色砂質土は、南門SB001北側の基壇側石付近にあり、東にも認められるが、時期は不明。床土かもしれない。南門の北や西は、耕作で削平され、床土直下が創建時の整地面や南面大垣SA600の基底面となる。中世頃の堆積層は、南門の北東部、後述する斜行溝SD629上、南門の南、後述する東西大溝SD625B付近から、調査区南端近くまで拡がる。中央部が0.6～0.7ｍと厚く、南と北に次第に薄くなる。主として東から流入したと推測される。

赤褐灰色粘質土は、調査区南端の西寄りから、後述する東西溝SD601付近に及ぶ（厚さ10～30㎝）。比較的多くの瓦や、８世紀中頃（平城Ⅲ）を主とし、10世紀後半頃までの土器を含む。調査区南端には、北西方向の小さな谷か溝SD596があり、これを整地したものかもしれない。

遺構との関係　南門と南面大垣は、後で詳しく触れるように、掘立柱南門SB599と掘立柱南面大垣SA600→礎石建ち南門SB001と掘立柱南面大垣SA630・631→礎石建ち南門SB001と築地南面大垣SA650・651と変遷する。　**３時期変遷**

南門SB599と南面大垣SA600は創建期。既述したように第４次調査で、SA600と一連になる東面大垣SA500Aが、基幹排水路SD530とともに７世紀中頃につられていることによる。SA600の北では、次のSA630の掘形より古い東西溝SD649の一部が検出されており、SA600の北雨落溝に比定できる。南方では、次の時期の東西溝SD625Aや南北溝SD611より古いSA615・621・624、東西溝SD609が創建期。SD601も、SD609とセットで道路SF608の側溝と考えうることからこの時期。東の基幹排水路SD530からの水はSD601・609が受けることになるが、ともに溝としては細い。南ではSD625Aが存在した可能性が強い。

次の時期の南面大垣SA630・631は、SA600の柱を抜取った後、ほぼ同じ位置に再建したもの。SA630とSA631の間は、SA600の柱を抜取ったままで埋戻しており、礎石建ち南門SB001が建設

されたと考えうる。南門SB001の南と東・西では、基壇にそって足場穴があり、一部は重複する（SS633A・B）。SS633Aは後述する東西大溝SD625Aに伴う橋脚SX622より古く南門創建時、SS633Bはその後の修理か解体に伴う。SB001の北には雨落溝SD647があり、SB001と東西のSA630の間にある暗渠SX632・643を通って南に排水する。後世の撹乱が著しいため、SA630・631の南雨落溝があって、これに注ぐのか、真直ぐ南に排水するかは不明。SA630の北雨落溝はこの時期にも踏襲されていたと推測する。

南門SB001造営期には、南に基幹排水路である素掘りの東西大溝SD625Aと、これと一連のSD611・612及びSD606がつくられたと判断。その根拠は、参道SF610の両側溝となるSD611とSD612が、SB001の基壇の東・西両端に揃い、SB001を意識してつくられたこと、SD625Aより古い土坑SK626から７世紀後半（飛鳥Ⅳ）の土器、SD625AやSD611から平城Ⅲ（新）、８世紀中頃の土器が出土し、創建時に後続する時期に比定しうることなどにある。南門前の橋脚SX622は、次のSD625Bに伴う石敷下にあり、SD625Aに架る。SX622のうち１本は、年輪年代から665年頃であるが、他の２本はSA600の柱を転用したものと推測。南門SB001の北にある参道SF640は、側石の一部が残るだけだが、SB001の雨落溝SD647の側石と一連であり、この時期になる。SD601は、新造されたSD606と対をなし、道路SF608の南側溝として、この時期にも存続しようが、赤褐灰色粘質土が上にのり、８世紀中頃には廃絶した可能性がある。幢幡支柱SX605も赤褐灰色粘質土で覆われるので、下限は８世紀中頃となろう。

天智朝造営を物語るか

東西大溝SD625Aは、改作し、南門SB001の前は石組となる（SD625B）。その上限は８世紀中頃である。SD625Aに架る木橋SX622もSX623に改作される。南面大垣が築地SA650・651に改作されるのがこの時期かは決め手に欠ける。東面大垣が築地SA535に改められた、10世紀前半になる可能性がむしろ高い。南門西の南面大垣SA631を挟んで南と北にある東西溝SD637・639は、心々距離が約4.9mと広く、出土した土器も９世紀後半～10世紀前半であることから、築地SA651の南・北雨落溝に比定できる。東のSD642は、位置から、SA650の南雨落溝になる。南門SB001東脇の暗渠SX632の北口は、ある時期に榛原石の切石SX659で塞いでいる。この東にもその抜取り跡と思われる細溝が残る。築地SA650本体の裾を示し、少なくとも暗渠SX632付近では裾に切石を立てていたとみられる。なお、SD637・639の肩には、東西に各２個の古い柱穴がある。SA651の足場穴（SS645・646）と推定できる。

南門SB001の東では、南面築地上を南北溝SD629が斜行しながら、東西溝SD625Bに流れ込む。出土した新しい土器は10世紀後半だが、11世紀前半に倒壊した東面・南面（東辺部）回廊の東南隅から南か西に流れるSD561（第５次調査区）がSD629に注いでいたとみて誤りはなく、南門東の南面築地SA651の廃絶も11世紀前半頃に比定できる。ただし、SD629は、南面回廊南端近くまで真直ぐであり、のちにはSD236も流れ込んだとみる方がよい。

南門SD001の基壇南西部や、西の南面大垣SA651の南雨落溝SD637は、10世紀前半の土器を含む土坑SK635が破壊している。だが、上述したSD629やこれより新しいと推測されるSD236が、南門SB001や中門SB003を避けるようにして流れていることからすると、南門や西の南面回廊は11世紀前半以降にも存続した可能性が十分あると考える。